平成２７年度　第２回講演会　記録

日　　時	平成27年4月25日（土）　13:00～16:00
会　　場	此花会館　梅香殿　３Ｆ大ホール
講　　師	首都大学東京　都市環境学部　特任助教　　福島　慶太郎
演　　題	森林における水動態
備　　考	参加者数　　１８８名、　　記録　　中垣　尚治

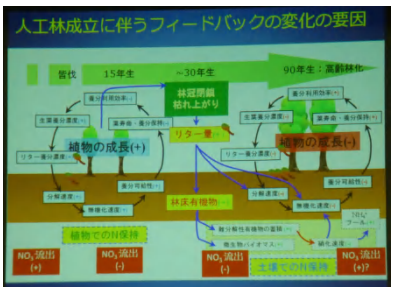
首都大学東京（旧東京都立大学）の新進気鋭の福島先生（35歳）をお迎えして、シニア講座生は期待を持って会場を埋め尽くした。特に森里海連環のキーである水に関する講義であり、熱心に聴取した。

森林と水といえば、先ず大気から降ってきた水がどのような経路を経て下流（海）に達するかという事が第一に考えられる。一般的には、地表面での蒸発（遮断蒸発）が20%、植物に吸収され蒸散によって大気に帰るもの20%、そして地下水として蓄えられ渓流に流れて海へ注ぐもの60%と云われる。

今回の講義の主テーマは、上記のような水自体の動きとは別に、水に含まれる物質を調査することによって森林の生態系を探ろうという研究内容であった。最終的に渓流に出て来る水質を調査する。人間に例えれば尿検査に模される。中でも窒素は水に溶けたイオン形態で生物は取り入れる。そのためアンモニア態や硝酸態の量を調べる事によって、植物・微生物の形態が推察できる。この物質循環を調査することによって、例えば森林を伐採すると植物が吸収していた硝酸態窒素が流出し、植生が回復すれば減少することが分る。最近、シカの食害が話題になっているが、芦生研究林でのシカの食害を調査するために、13ha を網で囲って下層植生を復活させて渓流の硝酸態の量を測り、金網で囲う前後で比較したら差があったという研究成果が報告された。

また由良川の多くの地点で実施された水質調査結果も報告された。その結果は、森林の伐採などの影響よりも、人家や放牧などからの硝酸態・富栄養物質の流入によって海が栄養を得ているという実態、「森は海の恋人」よりも「里は海の恋人」状況であるらしい。田中先生の最後の講評で、森と海が繋がっている間に人＝里が関与しているという今日の発表であったが、意図した訳では無いと断られたが、「森里海連環学」として里を重要視した先見の明を話された。

福島先生（右）を紹介される田中先生（左）



講義内容のパワーポイント資料